

ダニエル書 - 第八十二号

預言のパズルを解き明かす：ダニエル書11章の歴史とアドベンチズムにおける「デイリー」の意義

Jeff Pippenger

2024-02-15

アドベント主義の四世代を表すエゼキエル書8章の四つの忌むべきものという文脈で、1863年から1989年の終わりの時に至るまでの歴史を検討した後、私たちは1989年に封印が解かれた知識の増加に目を向ける。その知識の増加は、ダニエル書11章の最後の6節に関するものであった。1989年、私たちの小さな安息日の学びのグループは、聖書予言の改革線を見出した。これはフューチャー・フォー・アメリカがしばしば言及するもので、すべての改革線における出来事の順序を確立しており、そのことによって、予言の学徒は「line upon line」という後の雨の方法論の適用を実践できるようになる。

数年のうちに（1992年には）、私はダニエル書11章の最後の6節を扱った論文を書き上げていた。その論文は自分自身の満足のために書いたもので、研究を公に流布する能力も意図もなかった。1994年までに、その論文はアドベンチストの自立伝道団体の手に渡り、1995年には、その団体が発行する月刊誌に、ダニエル書11章の最後の6節を扱った全11回の連載記事が掲載された。『預言の霊』の著作の中でダニエル書11章に対する具体的な言及はごくわずかにしかないが、その中で最も重要なものが、私がこれらの節について提示した適用の妥当性を支える中心的な論拠となった。

私たちには無駄にできる時間はない。騒乱の時代が私たちの前にある。世界は戦争の気運にかき立てられている。まもなく、預言で語られている苦難の出来事が起こるだろう。ダニエル書第11章の預言は、ほぼ完全な成就に達している。この預言の成就として起こった歴史の多くは、繰り返されるだろう。第30節には、『悩まされるであろう』とされるある勢力について語られている。[ダニエル書11章30-36節引用。]

「これらの言葉に描かれているのと似た光景が起こる。」Manuscript Releases, 第13号, 394.

ホワイ夫人は、1798年「終わりの時」であるとはっきり述べている。

「しかし、『終わりの時には多くの者があちこちを行き巡り、知識が増し加わるであろう』と預言者は言う。ダニエル書12章4節。……1798年以降、ダニエル書の封印は解かれ、預言に関する知識は増え、多くの人々が裁きの時が近いという厳粛なメッセージを宣べ伝えてきた。」『大いなる論争』356頁。

ダニエル書11章40節は「そして、終わりの時に」で始まる。

終わりの時には、南の王が彼に攻めかかり、北の王は戦車と騎兵と多くの船を従えて、つむじ風のように彼に向かって来る。彼は諸国に侵入し、洪水のように押し流して通り過ぎる。ダニエル書 11章40節。

預言の霊による直接の裏づけがなくても、四十節は、1798年に始まった一連の出来事の幕開けを画していることは明らかである。これらの出来事は人類の恩恵期間の終結へと至る。というのも、ダニエル書12章1節は「その時、ミカエルが立ち上がる」と述べており、ホワイト夫人はミカエルが立ち上がる時に人類の恩恵期間が閉じられるとはっきり述べているからである。

「その時、あなたの民の子らのために立っている大いなる君ミカエルが立ち上がる。国が始まって以来、その時までかつてなかったような苦難の時が来る。しかしその時、あなたの民は救い出される。書に名を記されている者は皆。」ダニエル書12章1節。

第三天使のメッセージが閉じられると、憐れみはもはや地上の罪ある住民のために訴えない。神の民はその働きを成し遂げた。彼らは「後の雨」「主の御前からの潤い」を受け、目の前の試みの時のために備えられている。天では御使いたちが慌ただしく行き来している。地から戻ってきた一人の御使いが、自分の働きは終わったと告げる。最後の試験が世にもたらされ、神の戒めに忠実であることを証明したすべての者は「生ける神の印」を受けた。そこでイエスは天の聖所での取りなしをおやめになる。御手を上げて大声で「事は成った」と言われ、そして厳粛な宣言をなさるとき、すべての御使いの軍勢はその冠を脱ぐ。「不義な者はなお不義を行え。汚れた者はなお汚れたままであれ。義なる者はなお義を行え。聖なる者はなお聖くあれ。」黙示録22章11節。すべての者の運命は、生か死かについて決定された。『大争闘』613。

ダニエル書11章40節は1798年に始まり、そして45節では、北の王（教皇権）が助ける者もなく終わりに至るとき、人類に対する猶予期間が閉じられる。というのも、次の節が「その時に」と述べており、これによって直前の節、すなわちダニエル書11章45節で表されている「時」を特定しているからである。北の王（教皇権）は、人類に対する猶予期間が閉じるときにその終わりに至る。

したがって、ダニエル書11章の最後の六節に記された歴史は、1798年に始まり、人類に対する恩寵期間の終わりに至る一連の出来事を指し示している。ホワイト夫人が生きていた時、1798年は当然ながら彼女にとって過去の出来事であった。彼女が「ダニエル書11章の預言はその完全な成就にほとんど到達している」と述べたとき、彼女が指しているのは1798年以後で、かつミカエルが立つ前に起こる歴史にほかならない。さらに彼女は、「この預言の成就として起こった歴史の多くは繰り返される」と明言し、これによって預言の学徒に対し、「ほとんど完全な成就に到達している」ダニエル書11章の最終の歴史が、同じ11章に示された他の時代の歴史の中に型として示されていることを教えているのである。

彼女がその最も重要な預言の鍵を強調したのち、彼女は三十節から三十六節を引用し、「これらの言葉に描かれているのと類似した場面が起こるであろう」と述べている。ダニエル書11章の最終的な成就を理解したいと願う預言の研究者たちに、靈感は一つの鍵を与えた。その鍵とは、ダニエル書11章の最後の六節に記された歴史が、三十節から三十六節に示された歴史と並行しているということであった。この啓示からは豊かな光がもたらされるが、ここで考慮すべきなのは、ダニエル書11章三十一節で「日々のもの」が取り去られるという点である。

人類の猶予期間の終わりへと至る一連の出来事の順序を示す歴史を正しく理解するためには、預言の研究者は「the daily」を正しく理解していなければならない。三十一節が、キリストの聖所における奉仕が取り去られることを指しているのか、あるいは異教が取り除かれることを指しているのかを理解することは、ホワイト夫人が「これらの言葉で描写されていることに類似した光景が起こるであろう」と書いたときに言及した並行する歴史を正しく理解したいのであれば、絶対に不可欠である。

もちろん、ラオデキア的アドベンチズムは、ダニエル書11章40節の成就が1989年のソ連崩壊を指し示していることを認めなかったが、その節はまさにそれらの出来事を指し示している。1989年に40節が成就したこととともに到来した、預言的な知識の増し加わりを正しく理解しようと願う者たちにとっては、その時、「常のもの」の正しい理解が「現在の真理」となった。20世紀初頭には、その正しい理解は重要であった。というのも、それは、主がウィリアム・ミラーを用いて確立した土台となる真理の不可欠な一部だったからである。

しかし、二十世紀の最初の十五年間において、「the daily,」がキリストの聖所での働きを表していると主張するサタンのプロテスタントの見解は少数派の立場であり、「the daily,」は異教の象徴であるという真理をめぐって論争をあえて起こさせる価値はなかった。だからこそ、ラオデキア的な歴史修正主義者たちからは、「『the daily,』の主題は試験問題にしてはならない」とか、「『the daily』の主題は騒ぎ立ててはならない」といったことを耳にするのである。こうした特定の議論で無学な人々を先導する際に修正主義者たちがいつも省くのは、この主題に靈感が常に付してきた但し書きである。以下の一節はハスケル長老に宛てられている。

ハスケル長老は、20世紀の最初の10年とその次の10年に、プレスコットとダニエルズの攻撃に対して、“the daily”の正しい理解を擁護する先頭に立っていた。よく注意してほしい。ホワイト姉妹は、ハスケルの“the daily”に関する理解が誤っているとは決して示していない。彼女が彼に指示したのは、騒動が続くのを許さないようにすることだけであった。というのも、主は、真理の敵（プレスコットとダニエルズ）が自分たちの誤った教えを押し進め続けるための継続的な場を提供することを望まれなかったからである。その箇所では、ハスケルは「図表」の件で叱責されているが、その図表とは1843年の図表のことである。ハスケルは、その論争の証しとして、その1843年の図表を復刻していた。しかし彼は単にそれを復刻しただけではなく、その図表の下部に、ホワイト姉妹の「1843年の図表は主の御手に導かれており、変更すべきではない」という一節を添えた。その箇所を読むとき、彼女が「at this time」と言っている回数を数えなさい。

「私はあなたがたにこう伝えるよう指示されています。今は『レビュー』で、人々の心を動揺させるような問題を取り上げないでください。……私たちには今、不要な論争に入っていく時間はありません。しかし、心と生活の真の回心のために主を求め、必要性について、真剣に考えるべきです。魂と精神の聖化を得るために、断固たる努力がなされなければなりません。」

私は、私たちが一致団結した姿勢を保つ必要性について、忠告を受けてきました。これは、今の私たちにとって重要な事柄です。個人として、私たちは細心の注意を払って行動する必要があります。

私はプレスコット長老に手紙を書き、私たちの過去の経験の欠点を指摘しているかのように見える話題を Review に持ち込まないよう、極めて注意しなければならないと伝えた。また、彼が誤りがあったと考えているこの件は重大な問題ではなく、もし今それを目立つ形に取り上げれば、敵はそれにつけ込み、針小棒大にするだろうとも伝えた。

あなたにも申し上げますが、この件 [ダニエル書8章の“DAILY”の正体] は今は騒ぎ立てるべきではありません。いいえ、兄弟よ、私たちの経験がこの危機にある今、あなたが再版させたあの図表は流布すべきではないと私は感じています。あなたはこの件で誤りを犯しました。サタンは混乱を生み出す問題を引き起こそうとして、断固として働いています。この問題で私たちの牧師たちが対立するのを見ることを喜ぶ者たちがおり、彼らはそれを大いに利用するでしょう。

「この問題について賛否いずれの側から何が語られるかに関して、今は沈黙こそが雄弁であると私は教えられた。サタンは、私たちの指導的な牧師たちの間に分裂を生じさせる機会をうかがっている。皆が一堂に会してこの件について合意に達することができるまで、その図表を公表したのは誤りであった。議論を招き、さまざまな意見を表面化させるに違いない主題を前面に押し出したのは賢明ではなかった。というのも、あらゆる項目が曲解され、何かを意味するように仕立てられて、この事業に害を与えることにしかならないからである。私たちは、偽りの証言をいとわないことを示してきた人々の虚偽の言明に対処するだけでも手一杯である。」『Manuscript Releases』第9巻、106、107。

前回の記事では、エレン・ホワイトが、審判の時の叫びを告げた人々は「the daily」について正しい見解を持っていたこと、そして「the daily」がキリストの聖所の務めを表すとする Prescott と Daniells の見解はサタンから来たものであることを述べている、と明らかにした。彼女は論争の継続を許したことについて Haskell を叱責したが、「the daily」が何を表すかという真理に関する彼の立場そのものについてはそうしなかった。当時、大多数はなお「the daily」に関する開拓者たちの理解を信じており、さらに重要なのは、1989年の「終わりの時」に封印が解かれることになっていたダニエル書十一章のその節は、まだ何十年も先の未来であったということである。そのとき（1989年）には、「the daily」に関する正しい見解が不可欠となる。修正主義者たちはいつも、その特定の時期に限定されたエレン・ホワイトの限定条件を、自分たちの作り話の料理からは外してしまう。以下の一節にある時間的な限定を数えなさい。

私は、バトラー、ラフバラ、ハスケル、スミス、ギルバート、ダニエルズ、プレスコットの諸兄と、ダニエル書8章の「the daily」の意味について自分の見解を熱心に主張してきたすべての人々に申し上げたいことがあります。これは試金石とすべき問題ではなく、そうして扱われたことから生じた動揺はきわめて不幸なことでした。混乱が生じ、私たちの兄弟の中には、この時期、私たちの都市でなすべき働きとして主が示された事柄について、当然払われるべき思慮深い検討から心がそらされてしまいました。これは、私たちの働きの大いなる敵を喜ばせることになりました。

私に与えられた光は、この問題についての騒ぎを大きくするようなことは何ひとつしてはならない、というものです。これを私たちの講話や議論に持ち込み、重大事とし

て長々と論じることのないようにしましょう。私たちの前には大いなる働きがあり、なすべき本質的な働きから一時間たりとも失う余裕はありません。私たちの公の努力は、私たちが明確な光を与えられている真理の重要な筋道を示すことに限定しましょう。

ヨハネ17章に記されたキリストの最後の祈りに、あなたの注意を向けていただきたいと思います。私たちが語ることのできる主題は多くあります。聖なる事柄、信仰を試す真理、そしてその簡素さのうちに美しいものです。これらについては、強い熱意をもって取り上げてよいのです。しかし今は、『the daily』や、兄弟たちの間に論争を引き起こすようなほかのいかなる主題も持ち込まないでください。というのも、それは、主がまさに今、私たちの兄弟たちの思いを集中させてほしいと望んでおられる働きを遅らせ、妨げるからです。意見の著しい相違を露わにするような問題をあおり立てるのではなく、むしろ、御言葉から、神の律法の拘束力ある要求に関する聖なる真理を示しましょう。

私たちの牧師たちは、真理を最も好ましい形で提示するよう努めるべきです。できる限り、皆が一致して同じことを語りましょう。説教は平易にし、容易に理解できる重要な主題を取り扱うようにしましょう。私たちのすべての牧師が自らを低くする必要を悟るとき、主は彼らとともに働くことができます。今、私たちは再び回心する必要があります。そうしてこそ、神の御使いたちが私たちと協力し、私たちが仕える人々の心に聖なる感化を及ぼすことができるのです。

私たちは、キリストのような一致の絆に結ばれて一つに溶け合わなければならない。そうすれば、私たちの労苦はむだにはならない。綱をそろえて等しく引き、争いを持ち込んでではない。真理が人々を一つにする力を明らかにしなさい。そうすれば、それは人の心に強い印象を与えるだろう。一致には力がある。

今は、重要でない相違点を目立たせる時ではない。主と生きた強い結びつきを持たない者が、キリスト者としての経験の弱さを世に明らかにするなら、私たちを注意深く見張っている真理の敵はそれを最大限に利用し、私たちの働きは妨げられるだろう。すべての者は柔和を養い、心の柔和でへりくだったお方から教訓を学びなさい。

「the daily」の問題は、これまで行われてきたような運動を引き起こすべきではない。この問題の賛否両派の人々による扱い方の結果、論争が起こり、混乱が生じた。

彼の兄弟たちと彼らの信仰を非難する内容の小冊子を発行したラリー・スミス兄弟の行為は、神に承認されたものではなかった。そしてプレスコット長老に申し上げます。主はこの件についてあなたに重荷を負わせてはおられません。

私は、Daniells 長老が、私たちの指導的な兄弟たちの間でこの件について意見の相違があることを知りながら、いくつかの所でそうされたように、この件を前面に押し出したと聞いて、心を痛めました。

私たちの兄弟の中には、知恵に導かれず、「the daily」の解釈に関する自説を堅持するための努力がもたらす結果について、因果関係を明確に考えていない者がいる。この問題について意見の相違がある現状にあっては、それを強調してはならない。いっさいの争いをやめよ。このような時には、沈黙は雄弁である。

「今の時代における神のしもべたちの務めは、都市でみことばを宣べ伝えることである。キリストは魂を救うために来られたので、私たちは、彼の恵みの施し手として、大都市の住民に彼の救いの真理を伝える必要がある。」パンフレット、第20号、11、12.

彼女が言及していたラリー・スミス兄弟は、その状況にとりわけ憤慨していた。というのも、プレスコットとダニエルズが「the daily」に関して彼が記した内容を改変するために書き換えようとしていたのは、彼の父が著した『ダニエル書と黙示録』だったからである。スミス兄弟は真理を、そして自分の父をも擁護していた。彼女はこの論争を、繰り返し「この時点では」という言葉で条件づけており、終わりの方で次のように述べている。「この主題に関する意見の相違という現状があるうちは、それを前面に出さないようにしなさい。」今日、「the daily」を教えているアドベンチズムのすべての大学は、サタン的な見解を教えている。今日は、明らかに当時と同じ状況ではない。

アドベンチズムの第二世代は1888年の反逆の時に始まり、指導部の間で心霊主義が確立された。その状況は、責任ある地位にある者たちが、自分が個人的に真理と見なすものなら何であれ推進しようとしたために、疎外と分裂の環境を生み出す、より大きな心霊主義的迷妄の進展への扉を開いた。ダニエルズ、プレスコット、ケログのような人々は、エゼキエルが、「イスラエルの家の古老たち」である七十人の長老が「暗闇で、それぞれ自分の思いの密室で何をしているのか？ 彼らは『主はわれらを見ておられない』と言う」と示した、その歴史の象徴となった。

その世代において、1888年のメッセージの使者であった二人は、神殿の壁、そして彼らの心の壁に偶像を描いていたエゼキエルの七十人の長老を呑み込んだ論争と混乱、そして心霊主義のただ中で道を踏み外した。医療伝道はケログの心霊主義のために取り去られてしまい、それでもなおラオデキア的アドベンチズムの修正主義者たちは、無学な人々に対して、あの世代の混沌から何らかの勝利が生まれたのだと信じさせている。士師の時代にも並行する歴史があり、士師の歴史の総括はこの時期に完全に当てはまる。というのも士師記の最後の節にはこうあるからである：

そのころ、イスラエルには王がいなかった。人はおのおの、自分の目に正しいと思うことを行った。士師記 21:25

これらの記事を進める中で、なぜ士師記の歴史がアドベンチズム第二世代の歴史に対応しているのかを示していくが、ラオデキア的アドベンチズムの歴史を考察する際には、入手しやすい歴史が歴史修正主義を行う人々によって提供されてきたことに留意すべきである。ホワイト夫人は、その時代に「the daily」という主題が騒がれることを確かに望んではいなかった。実際には、彼女が「天から追放された天使たち」に導かれていると述べた少数の人々に、誤った考えを広めるための公の場が与えられていただけだったからである。だが、ホワイト夫人が誤りを抱えたままでもよいという考えを支持したと示唆するのは、彼女の信じていたこととはまったく正反対である。

「兄弟たちよ、キリストの大使として、心を真理からそらす傾向のあるこれらの副次的な問題に用心するよう、あなたがたに警告します。誤りは決して無害ではありません。決して聖めることはなく、常に混乱と不和をもたらします。それは常に危険です。

敵は、祈りによって徹底的に固められず、聖書の真理にしっかりと根ざしていない心に対して、大きな力を持っています。」『証言』第5巻、292頁。

次回の記事でこの研究を続けます。

私たちには一刻の猶予もない。私たちの前には苦難の時が迫っている。世界は戦争の気運にかき立てられている。まもなく、預言に語られている苦難の光景が現実となるだろう。ダニエル書11章の預言は、ほとんど完全な成就に達しようとしている。この預言の成就として起こった歴史の多くが、繰り返されるだろう。30節には、次のような力について語られている。「彼は苦々しく思って引き返し、聖なる契約に対して憤りを抱く。彼はそのように行い、さらに引き返して、聖なる契約を捨てる者たちと通じる。軍勢が彼の側に立ち、堅固な聖所を汚し、日ごとのささげ物を取り去り、荒廃をもたらす忌むべきものを据える。契約に逆らって悪を行う者たちを、彼は甘言で墮落させる。しかし、自分の神を知る民は力を得て行動する。民のうちの悟る者たちは多くの者を教えるが、彼らは剣と炎、捕囚と略奪によって、多くの日の間、倒れる。彼らが倒れるとき、わずかな助けが与えられるが、多くの者が甘言をもって彼らに付き従う。悟る者のうちの幾人かは倒れる。彼らを試み、清め、白くするためである。終わりの時に至るまで、定められた時がまだ先にあるからである。そして王は自分の思いのままに行い、自らを高め、あらゆる神の上に自らを大いなる者とし、神々の神に逆らって驚くべきことを語り、憤りが成し遂げられる時まで栄える。定められたことは行われるからである。」ダニエル書11章30-36節。

ここに記された言葉に描かれているような光景が起こるだろう。神を恐れる心のない人々の心を、サタンが急速に支配しつつあることを示す証拠を、私たちは目にしている。すべての者はこの書の預言を読み、悟りなさい。私たちは今、語られている苦難の時に入りつつあるのだから：

「その時、あなたの民の子らのために立っている大いなる君、ミカエルが立ち上がる。また、その時まで、国が存在して以来かつてなかったような苦難の時がある。その時、あなたの民は、書に名が記されている者は皆、救い出される。地の塵の中で眠っている多くの者が目を覚まし、ある者は永遠のいのちへ、ある者は恥と永遠の悔りへ。悟る者は大空の輝きのように輝き、多くの人を義に導く者は、とこしえまでも星のように輝く。しかしダニエルよ、この言葉を秘して、書を封印せよ。終わりの時まで、多くの者が行き巡り、知識は増し加わる。」ダニエル書 12:1-4. Manuscript Releases、第13号、394。